

最大限に力発揮の環境

「や」といって来た」。マツゲン箕島硬式野球部を支援する株式会社「松源」の桑原佑常務取締役営業本部長(43)は満足そうにうなずいた。チームが9月の全日本クラブ選手権で優勝し、今月29日に開幕する日本選手権に出場する。これを機に遠かった道のりが思い返されたのだ。

【加藤敦久】

マツゲン箕島 チーム紹介下

社会人野球 日本選手権

チームは1996年に地元の箕島高OBらでつくる「箕島球友会」として発足。選手たちは同社の社員として働いており、2019年に現在のチーム名に変更された。その年に日本選手権に出場したが、翌年からは他のクラブチームのレベル向上などで、出場権利が獲得できる「クラブ選手権優勝」を果たすことができなかった。

練習環境のさらなる強化に立ち上がったのは、チームOBだった。その中心となったのが大北匠(36)だ。13年に日本選手権出場を果たした時の主将で、引退後は会社に残り、バイヤーや店長を歴任し、会社の執行役員にまで出世した。

現場で働いている時は一つの目標があったという。「経営陣に意見や改善策を言える立場になって、後輩たちにもっと野球ができる環境をつくってあげたい」。部長職となった21年にはさっそく会社に「週1回は野球、仕事とない休養日を導入」「1日8時間勤務から6時間に縮小」などを進言し、受け入れられた。桑原常務は「選手OBが管理職となり、選手が求めることを代弁してくれるようになった」と歓迎する。歴史を重ねることで、支援企業とチームの関係がさらに深まった証しだ。

23年には遠征に使う専用バスを会社が購入。筋

支援企業など協力／選手の体に厚み



コーチが作った弁当を食べる選手たち—有田市で

カトレーニング機材も同社から寄付され、充実した。今年からは和歌山市の本社調理室でコーチ陣が料理を手作りして練習本拠地のマツゲン有田球場(有田市)に運ぶよう

とした。近年は指導実績のあるコーチ陣が加わった他、スカウト活動も充実。今春にチームのトレーナーとして入社した池田真麻

さん(29)はコンディショニングやトレーニングのメニューを指導する。グラウンドで最大限に力が発揮できるように、試合前に入念なアップを意識してやるようになった。選手たちは地域活動として、月1回、草刈りや溝掃除などに励むとともに、地元のマラソンや駅伝で運営を補助するなど有田市民との交流を深めている。県野球連盟の会長も務める同市の玉木久登市長は「全員が市に住所を移していただき、ボランティア活動もしてくれる。市にとっては大きな財産」と話す。市役所入り口には日本選手権出場の横断幕が張られた。

京セラドーム大阪での日本選手権本大会では、29日の開幕試合(午後6時開始)に登場。県や市の代表として胸を張って、NTT東日本(関東・東京)と対戦する。